

B-98 環境湿度及び被服の開口状態が人体に及ぼす影響について
東京家政大 中里喜子

目的 うだるようなおし暑さ、これが、わが国の夏季の暑さを表現する言葉である。暑さは、気温ばかりによるのではなく、湿度、風速などの要因が組み合わさって生じるものである。この湿度が人体に及ぼす影響に関する研究報告は数少なく、省エネルギーの叫ばれている現今、この種のデータは必要であり、意義あるところと考え、実証を行った。

方法 従来の研究報告によると、至適温度の範囲では、湿度の増減が、快適感に及ぼす影響は少ないとあり、又気温 30°C 以上に於いては、特に高湿度の場合脈搏数、血圧、呼吸など人体に及ぼす影響が大であるとの報告があるので、環境湿度を 30% に設定した。即ち中等湿度域から高温域へ上昇する境界の 30% とした。

湿度は 50% と 80% に設定し、湿度変化による影響を比較した。

被服の形態は4種とし、同質材料にて製作したもの（ポリエステル 65% ・綿 35% のブロード地）と着用し比較した。即ち衿型は開衿とYシャツにネクタイ使用との比較、袖は半袖と長袖の比較及び上向開口の衿と水平開口の袖の比較を行った。

皮膚温は銅・コンスタンタンの熱電対、被服内はミニマ湿度計、被服表面はサーモグラフィ法により、被験者の主観調査も同時に行った。時間帯は前室 25°C に30分安静をとり、曝露室に100分その間10分おきに20分づつ3回椅座作業その後回復室にて30分と組んだ。

被験者は20~21才女子学生4名 日内変動の少ない9時30分から16時までに行った。

結果 環境湿度による影響が被服の形態別に得られたので、その考察をすると共に、被験者の個人的型、測定部位の差などの点について今回は報告する。